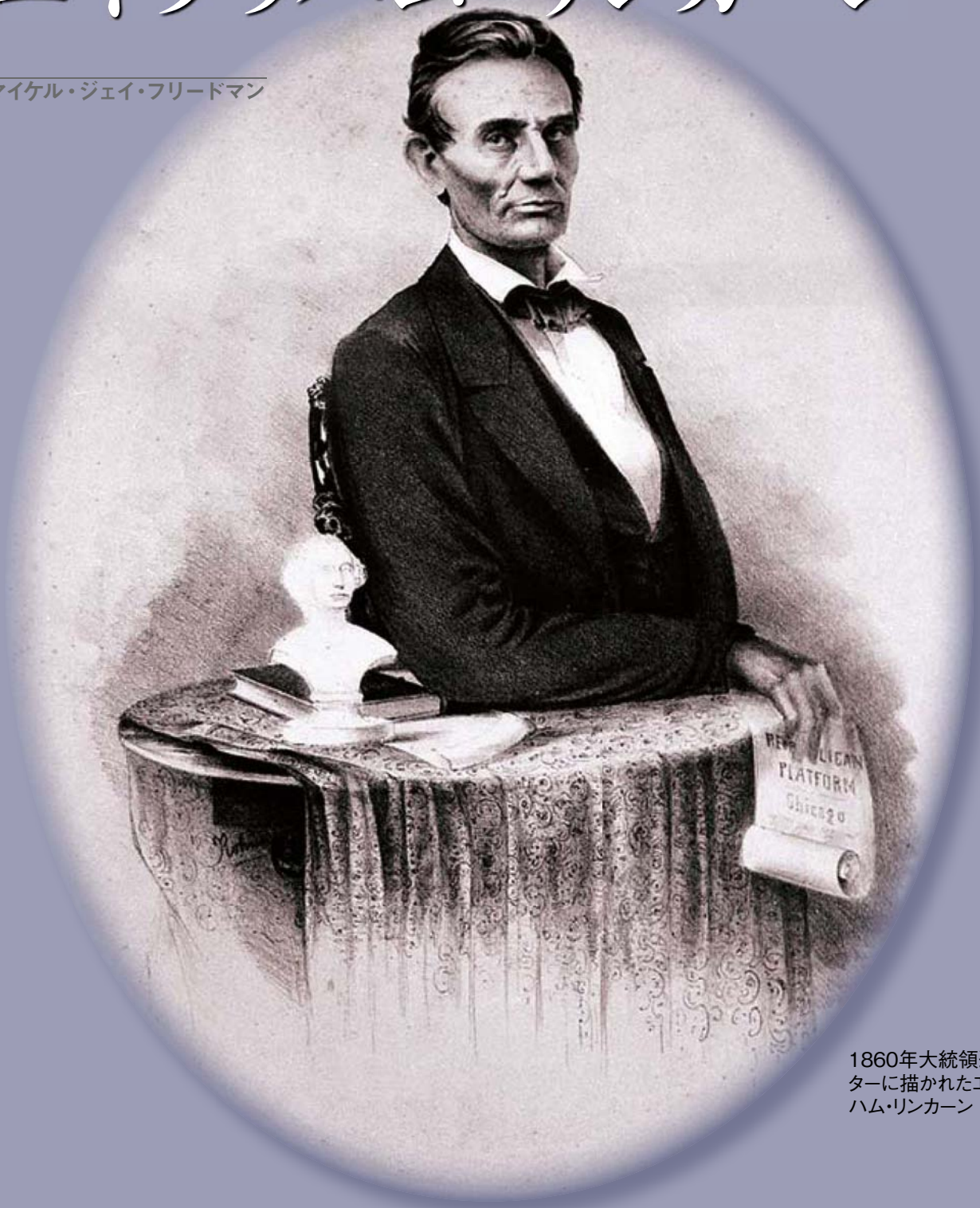
# ホワイトハウスへの道：1854年以降のエイブラハム・リンカーン

マイケル・ジェイ・フリードマン




1860年大統領選のポスターに描かれたエイブラハム・リンカーン

エイブラハム・リンカーンが1854年までに、政治家としての自分のキャリアは終わったと考えたとしても無理はない。連邦議会選挙でリンカーンが党の指名を獲得できたのは、1期のみで退任して地元の他のホイッグ党員に出馬のチャンスを譲ると誓約したからでもあった。リンカーンはこの約束を後悔し、弁護士事務所のパートナーであるウィリアム・ハーンドンに、「もし議会選挙に誰も出馬する意思がないという状況になったら、再びわたしを選出するという人々の権利を拒むわけにはいかない」と話している。リンカーン自身は、ワシントンで充実した2年の任期を過ごせたと感じていたし、メキシコ戦争反対の論客として名を成しつつあったが、一般の人々の間には、彼の続投を強く求める声はなかった。失意のうちにスプリングフィールドに戻ったリンカーンは、弁護士事業の立て直しに着手した。

「わたしは、たまたまこの大きなホワイトハウスをしばらくの間占有することになったが、わたしの父の子がここに入ったように、皆さんの子どもがこの館に入ろうと期待してもおかしくない。わたしがその生き証人である」

しかし1854年はまた奴隷制に関する地域間の脆弱な妥協に新たな亀裂が生じた年でもあった。自由州の集まる北部と奴隷州の南部は、互いに相手の慣習を自分たちのやり方に対する致命的な脅威であると考えるようになってきていた。リンカーンはこの議論に引かれて、徐々に公人としての生活に復帰していった。リンカーンが新たな事態に飛びついたのか、それとも新たな事態が彼を突き動かしたのかは分からない。しかしいずれにしても、国民が幸運に恵まれたことには疑いの余地がない。米国は最も必要とするときに最も偉大な指導者を見いだしたのである。

## 自由労働

エイブラハム・リンカーンは常に「自由労働」を擁護していた。それは、人は（リンカーンの時代、対象としていたのは「男」だけ）自分の望むやり方、望む場所で働くことができ、自分の名義で財産を蓄え、さらに一番重要なこととして、自分の才能と能力が許すかぎり自由に立身出世できるということを原則としていた。リンカーン自身がこの自助自立の模範だった。彼は1854年にこう書き記している。

> われわれの間には、終身被雇用者階級というものは存在しない。25年

リンカーンが大統領に就任する直前のホワイトハウス

> 前、わたし自身が雇われ労働者だった。昨日は雇われ労働者だった者が、今日は自分自身のために働き、明日は自分のために働いてくれる労働者を雇う。前進――状況を改善すること――こそ、対等な者同士が構成する社会のあり方なのである。

リンカーンは、北部の多くの人々と同じく、自由労働の方が奴隷を基盤とする南部の労働方式より経済的にも道徳的にも優れていると考えていた。そしてこう主張している。

> 自由労働には希望という励みがある。純然たる奴隷制には希望がない。希望が人の営みと幸福に及ぼす力は素晴らしい。奴隷所有者自身はそれを知っている。（中略）奴隷に麻の外皮を剥ぐ作業をやらせるときに、鞭で打っても１日75ポンドの量をこなさせることができない。１日100ポンドの作業を奴隷に課して、それを上回った分については報酬を払うと約束してみるといい。きっと奴隷は150ポンドこなすだろう。鞭に代わって、希望がその役目を果たすというわけだ。

リンカーンは、奴隷制が経済的に立ち行かなくなるときが必ず来ると考えていたが、同時に、短期的には個々の賃金労働者は奴隷労働者と競争できないし、する気もないだろうと理解していた。そこで、当時の多くの米国人と同様に、リンカーンは２つの政治的結論を引き出した。ひとつは、奴隷制が南部の砦の中で実践されているだけなら、やがては消滅するだろうということ。もうひとつは、もし奴隷制が新たな準州に波及するならば、自由労働者を押しのけて再び勢いづく可能性があるという結論である。

## 妥協の破綻

建国から日の浅い米国が西へ西へと国土を広げる中で、新しい州が連邦に加盟するときの条件、つまり「奴隷州」としてなのか「自由州」としてなのか、が決定的な重要性を帯びてきていた。その重要性が最初に浮上してきたのは、1820年から1821年にかけて、ミズーリの州昇格の申請をめぐって議論が起きたときである。トマス・ジェファソンはこうした地域間の緊張を「夜中に火災を知らせる鐘」にたとえた。緊張を和らげるには、両者が壮大な妥協案に合意する以外なかった。妥協の結果、議会は、ミズーリを奴隷州、メーンを

第１回リンカーン・ダグラス討論でイリノイ州チャールストンの聴衆を前にして演説するリンカーン

自由州として連邦に加盟することを認め、ルイジアナ購入地域のミズーリの南端に当たる北緯36度30分以北に位置する全域で、奴隷制を禁じた。メキシコに属していた領土が新たに取得されると、慎重に策定された「1850年協定」によって、カリフォルニアが自由州として連邦に加盟することが承認されると同時に、新しく「逃亡奴隷法」が成立した。同法の下で、北部の裁判所は、自由を求めて北に逃亡した奴隷の捕獲と強制送還を義務付けられた。

一方リンカーンと同じイリノイ州選出の連邦上院議員で民主党所属のスティーブン・A・ダグラスは、地域間の対立を解消するための別の方式を提示した。ダグラスの「国民（住民）主権」主義では、西部の準州は住民の意思によって、「自由州」としても「奴隷州」としても、連邦に加盟できるとされた。1854年、「カンザス・ネブラスカ法」が成立し、ミズーリ協定で設定した北緯36度30分の境界線は撤廃され、ネブラスカおよびカンザス両準州は住民主権に基づく体制づくりを進めることになった。

北部人の多くがこうした展開に怒りと不安を覚えた。彼らは、奴隷制は南部に限定されるものと思っていた。しかし、次のような事態を目にすると、話はまったく別になる。まず、奴隷制賛成の暴徒が、廃止論を唱える出版業者を自由州であるイリノイ州オールトンで殺害し、その印刷機を破壊した。また奴隷制賛成派と反対派が公然とぶつかり合い、「ブラディ・カンザス（血にまみれたカンザス）」としてやがて世に知られるようになる流血の抗争を繰り広げるのを目の当たりにした。さらに、北部の中心地で奴隷所有者が「逃亡奴隷法」によって認められた権利を行使するのを、手をこまねいて見ているしかないという事態が発生した。北部人は奴隷制の非道徳性に真っ向から立ち向かうことを余儀なくされたばかりか、北部の生活の底流にある自由労働の信念が、今や直接攻撃にさらされていると感じるようになっていたのである。

リンカーンは、カンザス・ネブラスカ法の成立に「雷に打たれたような」衝撃を感じ「呆然とした」と自らの立場を述べている。1854年10月にイリノイ州スプリングフィールドとピオリアで行った力強い演説を皮切りに、同法とダグラスに反対する急先鋒として登場したのである。「革命の父たち」は、南部諸州では奴隷制を容認することが政治的にやむを得ないと考えたが、「奴隷制を必要最低限の規模に制限し、閉じ込めた」とリンカーンは理解していた。事実、憲法を起草した人たちは、あらゆる婉曲表現を工夫して「奴隷制」という言葉さえ使うのを避けていた。「問題は見えない所に隠す。病人が腫れ物やがんを隠すのと同じように。一度にすべてを切除しようとすれば、出血多量で死ぬ恐れがあるからだ。しかし、これは一定の期間が経過したら切除に取り掛かるという約束があった上での処置である」

それから２年半の間、リンカーンはイリノイ州で新しい共和党の設立を支援した。地域間の対立が深まる中、リンカーンが所属していたホイッグ党は、北部派と南部派の意見の相違を取り繕うことができずに破綻していた。対照的に共和党は、北部の地域色と奴隷制反対をもっとはっきりと打ち出していた。スティーブン・ダグラスは動かなかったが、北部の民主党員の中には共和党に鞍替えする者もいた。新共和党の旗揚げに奮闘したことは、やがてリンカーンの政治力の源泉になるのだが、この時はまだ弁護士業に専念していた。

## 分裂した家

1857年３月、連邦最高裁がいわゆる「ドレッド・スコット判決」を出して激しい批判を浴びると、地域間の緊張を激化させた。アフリカ系米国人奴隷だったスコットは、所有者に自由準州であるウィスコンシンに連れて行かれ、その後、ミズーリ州に戻された。そこで、ウィスコンシンに居住したことで自分は自由の身になったはずであるとして訴えを起こした。裁判所はスコットの訴えを退けた。そして裁判所の示した判断が奴隷制を広範に（多くの人が疑問に感じるほど広く）認めるものであったため、北部人の間に不安が高まった。最高裁の多数意見は、議会には準州内における奴隷制を禁じる憲法上の権限がないというものだった。こうして、北緯36度30分の境界線（裁判が始まったときはまだ有効だった）は違憲とされ、奴隷制はカンザス・ネブラスカ法にかかわらずすべての準州で認められるとの判断が示された。ロジャー・B・トーニー裁判長はまた、アフリカ系米国人は合衆国の市民ではないため、独立宣言の保護下にも合衆国憲

法の保護下にもなく、「白人なら誰しも尊重しなくてはならない権利を有していない」とした。その結果、ドレッド・スコットは連邦裁判所に訴えを起こすことさえ認められなくなった。

北部の大半は、この判決に激怒した。シカゴ・トリビューン紙は、この判決によって自由州も奴隷制を認めざるを得なくなり、イリノイ州最大の都市であるシカゴはその意に反して、奴隷取引のマーケットになってしまうだろうと言い切った。リンカーンは、裁判所が今度は州による奴隷制の禁止を妨害するのではないかと恐れた。そこで、ドレッド・スコット判決を支持したダグラス上院議員の対抗馬として、1858年の選挙に立候補する決意を固めた。リンカーンは共和党の指名を受諾し、かの有名な「分裂した家」の演説を行った。

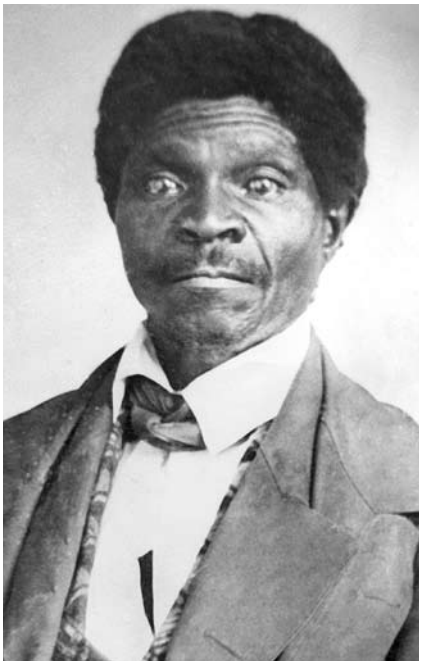
> 分裂して争う家は立っていることができない。
>
> 半分が自由、半分が奴隷という状態がいつまでも続けば、この国は持ちこたえることはできない。
>
> わたしは連邦が分解するとは思っていない。つまり、家が倒れると思っているわけではない。そうではなくて、分裂状態が終わるときがきっと来ると思っているのです。
>
> 連邦は結局、どちらかひとつになるのです。
>
> 奴隷制反対派が、（中略）奴隷制はいつか消滅する定めにあるものという考えが国民の意識の中に定着するように計らうか、それとも賛成派が、奴隷制をさらに推し進め、ついには古くからの州も新たに加盟した州も、北も南もすべての州で、同じように合法化されるようになるのか。どちらか一方です。

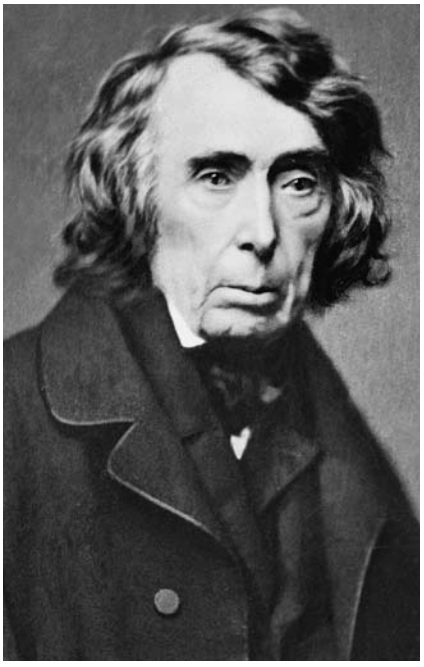
ニューヨーク・タイムズ紙は直ちに、リンカーン・ダグラス論争を「連邦で最も興味深い政治の戦場」と断言した。

リンカーンはダグラスに対し、イリノイ州各地で連続７回にわたる討論を挑んだ。こうして始まったリンカーン・ダグラス対決は、米国民主主義を象徴する好機となった。小さい町でも大きな町でも、フリーポートでもオールトンでも、ジョーンズボロでもゲールズバーグでも人々は集まってきた。馬に乗って、運河を往来するボートに乗って、または何マイルも歩き続けて、米国を二分する史上最大の問題についてこの２人の闘士による論争を聞こうとやって来たのである。両候補は極めて対照的だった。ダグラスは着こなしがスマートで美文調の語り口。上品を絵に描いたような人物である。一方のリンカーンはひょろ長く、見かけもしぐさもはるかに洗練されていない。しかし田舎弁護士リンカーンは、ダグラスが住民主権を唱えながら、奴隷制反対の開拓民が移住先の準州で奴隷制を妨げることを禁じたドレッド・スコット判決を支持したことを取り上げ、その矛盾を突いて痛撃を与えた。最終回の討論で、リンカーンは奴隷制をめぐる論争を次のような忘れ難い言葉で表現した。

> （この論争は）奴隷制を間違いだと見なす階級と、間違いとは考えない階級の対立によるものです。この点こそ、ダグラス判事とわたしのつたない議論が止んだ後も、この国で続いていく問題です。正しいとするか、間違っているとするか。これは、この２つの主義主張が世界中で繰り広げる永遠の闘争なのです。歴史が始まった時から互いに対立してきた信条であり、これからもずっと闘いは続くでしょう。一方が擁護するのは人類共通の権利であり、もう一方が主張しているのは、王たちが神から授かったとする権力なのです。

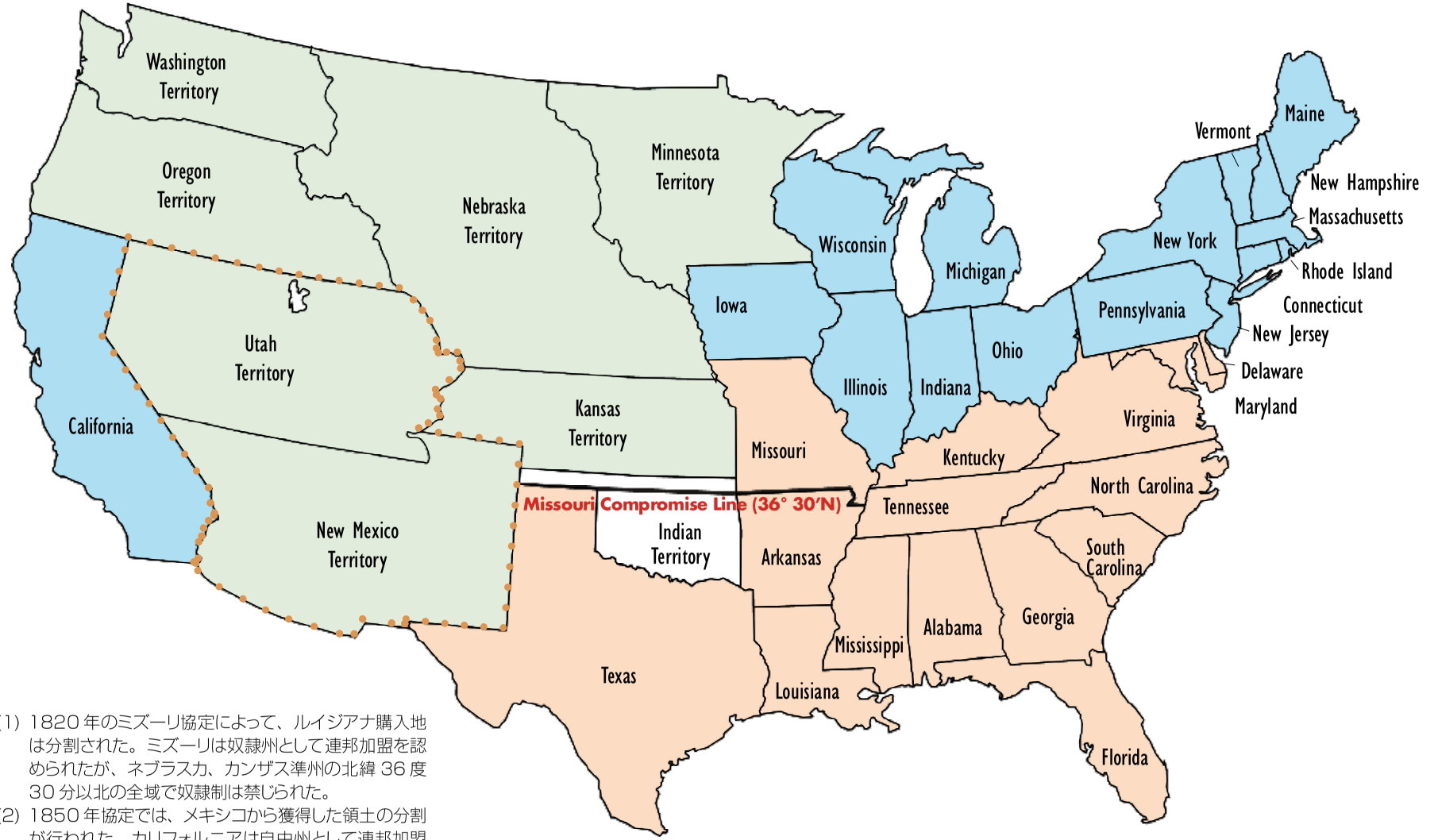
この時代の連邦上院議員は、直接選挙で選ばれるのではなく、州議会によって選ばれていた。州議会議員による投票の集計結果は、ダグラスの54票に対し、リンカーンは46票だった。しかし上院の有力議員を相手に善戦したリンカーンの健闘ぶりは、多くの人々の目に留まっていたし、リンカーン自身もここで手を引くつもりはなかった。友人にこう語っている。「戦いはこれからも続かなくてはならない。１回負けたからといって、いや、100回負けたと





ロジャー・B・トーニー裁判長（右）は、ドレッド・スコット（左）が米国市民ではないとの判断を示し、米国を南北戦争へと突き動かす一因をつくった。

# 自由労働に対する脅威（1857年）




自由州

奴隷州

1850年協定で、奴隷制を受け入れることができるようになった準州

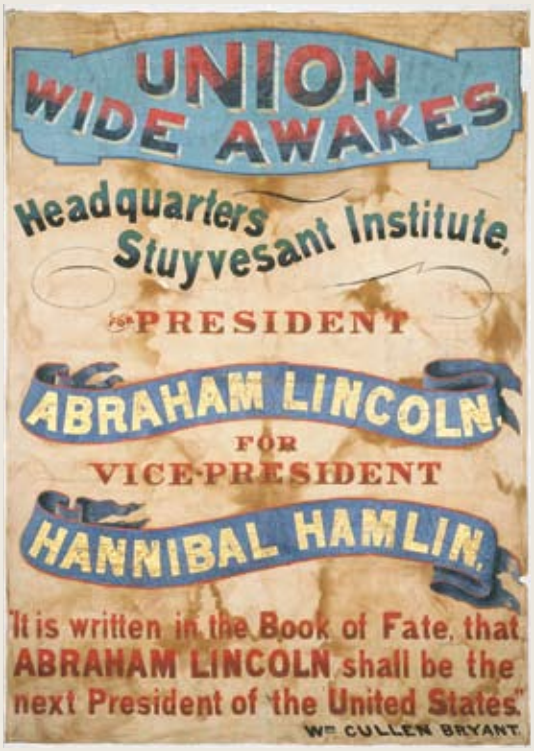
準州

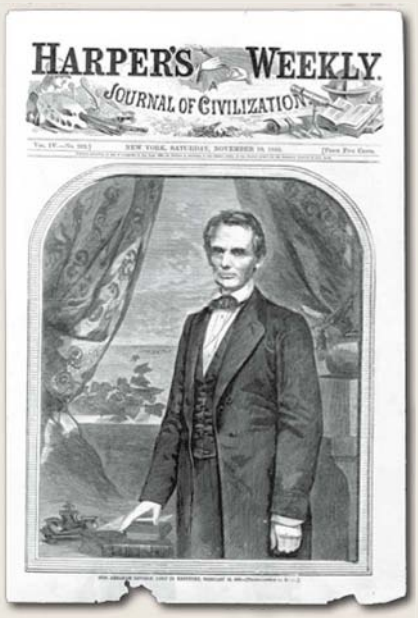
(1) 1820 年のミズーリ協定によって、ルイジアナ購入地は分割された。ミズーリは奴隷州として連邦加盟を認められたが、ネブラスカ、カンザス準州の北緯 36 度 30 分以北の全域で奴隷制は禁じられた。

(2) 1850 年協定では、メキシコから獲得した領土の分割が行われた。カリフォルニアは自由州として連邦加盟を認められたが、ユタおよびニューメキシコ準州では、入植者自身が奴隷制問題についての決定を行うことを許された。（「住民主権」）

(3) 1854 年のカンザス・ネブラスカ法により、住民主権はカンザス、ネブラスカ準州にも拡大された。

(4) 1857 年のドレッド・スコット連邦最高裁判決は、米国のすべての準州で奴隷制を認めた（ただし、準州は州への昇格にあたって、奴隷制を禁止する州憲法を採択することができるとした）。






（左上）1860 年大統領選の３人の有力候補者：左からリンカーン、ジョン・C・ブレッケンリッジ、スティーブン・A・ダグラス
（右上）1860 年の共和党選挙ポスター
（右下）全国紙は 1860 年までに、政界で頭角を現してきたリンカーンに着目するようになっていた。
（左）風刺漫画。描かれているのは、黒人を肩車し「合衆国憲法」と書かれたバランス棒を手にナイアガラの滝の上を綱渡りするリンカーン

1860年8月、地元支持者に囲まれる大統領候補者リンカーン（スプリングフィールドの自宅正面玄関の右側に白いスーツを着て立っている）

しても、市民の自由の追求を放棄してはならない」

## ホワイトハウスへ

リンカーンは1859年を通して中西部のいくつもの州を遊説して回り、ダグラスの住民主権主義への反対を訴え、奴隷制の拡大に対する警戒を呼び掛けた。おそらく、このときすでに、リンカーンの意中には大統領選出馬という大胆な目標があったと思われる。というのも、彼はダグラスとの論争をまとめて出版することを認め、1859年12月には自伝を書く準備に取り掛かっているからだ。

1860年2月、リンカーンは米国の最重要都市ニューヨークへと旅した。主な目的は、共和党の大統領候補指名に大きな発言力を持つと予想される市民団体や金融界の指導者と会い、演説することであった。クーパーユニオン・カレッジに集まった多くの聴衆は、粗野で無骨な中西部男が登場するものと思っていた。最初、彼らの期待は裏切られなかった。聴衆のひとりは、このときのリンカーンを次のように回想している。

> 「ひょろりとして不恰好な体型。身にまとった服は今回の旅のために新調したものだろうが、下手な仕立屋が作ったに違いない。大きな足、ぎこちない手。（中略）長くて痩せこけた頭。その上に、きちんとブラシをかけたようには見えない、もじゃもじゃした髪。ニューヨークが思い描く洗練された政治家のイメージとは一致しなかった」

そしてリンカーンは話し始めた。自分が決して急進派ではないことを聴衆に納得させるように配慮した、落ち着いた語り口で、合衆国憲法署名者の大多数が、連邦政府は準州における奴隷制を禁止することができると考えていたことを論証してみせた。そして本当の急進派はむしろ、自分たちの憲法解釈が受け入れられなければ連邦離脱も

辞さないとする南部人であると訴えた。「南部の目的は、要するに、論争になっているすべての問題について、自分たちに都合のいいように憲法を解釈し施行することが認められない場合には、政府を破壊するというものである。つまり、すべての事柄を、自分たちが支配するか、国を滅ぼすかなのである」リンカーンは、奴隷制を現在それが行われている地域に封じ込めるべきである、準州に波及することを何としても食い止めなくてはならないと北部人に呼び掛けた。

クーパーユニオンでの演説は大いに共感を呼んだ。ニューヨークの新聞数紙が演説の全文を掲載した。記者のひとりは、リンカーンを「聖パウロ以来最も偉大な人物」であると宣言した。有力紙ニューヨーク・トリビューンの編集者であるホレス・グリーリーは、リンカーンを「創造主の造りたもうた雄弁家のひとり」と評した。そしてリンカーン自身も、大統領選立候補の可能性について友人と語り合う中で、「そんなことも少しだけ考えている」と述べている。

共和党員の多くは、大統領候補指名を受けるのは有力なニューヨークの連邦上院議員ウィリアム・スワードであろうと考えていた。しかしスワードは、ペンシルベニア、インディアナ、イリノイでは弱かった。これらは決定的に重要な州であり、中西部出身者を立てた方が選挙民にアピールするのではないかと思われた。もし最初の投票でスワードが指名を獲得できなければ、共和党はこれら3州のいずれかの出身者に白羽の矢を立てる可能性が大いにあった。「わたしの名前はこの世界ではあまり知られていませんし、多くの人々が真っ先に挙げる候補ではないでしょう」とリンカーンは説明した。「それならばわれわれの方針は、人の気分を害さないことです。向こうからこちらに歩み寄ろうとする気分にさせる方が得策でしょう、向こうが一番のお気に入りを諦めざるを得なくなったときのことを考えれば」結局これが正しい状況分析であったことが証明された。スワードは第1回投票で指名に必要な得票数を獲得できず、中西部の各州が票をリンカーンに回したために指名争いから姿を消した。そしてリンカーンは3度目の投票で指名を確保したのだった。

1861年3月4日、新大統領の就任宣誓式を執り行うロジャー・B・トーニー連邦最高裁判所長官

1860年の総選挙は、共和党候補者にとって極めて有利だった。といのうも、当時すでに解散していたホイッグ党と同じように、民主党も内部の派閥間の争いで動きが取れない状態にあったのだ。民主党は北部と南部の2つの陣営に分かれてそれぞれ候補者を擁立した。リンカーンは4人の候補者が争った一般投票で得票率は40%にも満たなかったが、選挙人投票で過半数を獲得し、大統領選を制したのである。

南部はリンカーンの大統領就任を受け入れようとしなかった。後でリンカーン自身が語っているように「戦争になった」のである。戦争になって初めて、米国民は史上最大の試練の中で選んだ男の英知、力強さ、そして最終的には度量の大きさを目の当たりにすることになる。

**マイケル・ジェイ・フリードマン**は米国国務省国際情報プログラム局出版部の責任者。米国政治外交史で博士号を取得している。